



すすんで学ぶ子
心豊かな子
たくましい子

中宮

令和5年7月20日
第652号
枚方市立中宮小学校
校長 池原 義人

「楽しくカー杯」の夏休み ～今しかできないことを～

個人懇談会ありがとうございました

高校生相手の個人懇談は、就職や受験など進路に直結していたので、学校側である担任として厳しくならざるを得ませんでした。学校(私学)生き残りのために、入学してきた生徒たちの進路を保障しなくてはなりません。その生徒が送ってきた学校生活と、見合わない要望を出してくる保護者に負けないのです。「この成績で大学受験?受けてもらってもいいですが合格はしないですよ」「この企業は、B組のI君が希望しているから受けられません。簿記も文書処理も1級ですから」「欠席が多すぎです。就職は無理ですよ」等、保護者の気持ちも考えず、ひどいことをしてきたものです。

小学校教員(小学校2年生担任)として最初の個人懇談、今までの学校と同じように成績をグラフ化して説明していました。もちろん小学2年生に進路相談はありません。成績もグラフ化するほどの差はありません。5分以内に終わっていました。会話をつないでくださる保護者のときは、なんとか10分程度はもちましたが、保護者も会話が苦手な方だと、沈黙と一言二言のやりとりが繰り返されます。

個人懇談、とても苦手でした。

それを助けてくれた取り組みが「いいとこみつけ」でした。1学期間、友だちが見つめてくれたその子の良いところ、担任の自分が見つけたその子の良いところを打ち込んで、保護者に渡します。

毎日何十人もの学級児童が、一人で何人もの「いいとこみつけ」用紙を提出します。それを毎日打ち込んでためていくこと、あゆみの所見とは別にもうひとつ担任所見(「いいとこみつけ」の文書)を作ること、大変でした。でもそれをしたとたん、今までのことが嘘のように会話がはずみました。クラスがどんどん良くなっていくというおまけもつきました。そして何より、その方が子ども達の成長につながったことは、間違いのない事実として断言できます。

各クラスの個人懇談での会話、はずみましたでしょうか?

今日持ち帰った「あゆみ」、保護者による「いいとこみつけ」よろしくをお願いします。

「大人になってからできることは、大人になってからやりなさい」

夏休みに関わる苦い思い出は、令和3年度4年度の校長通信でも書きました。

毎年、夏休み明けに退学していく生徒がたくさんいる学校でした。退学していく生徒の大半が、校則で禁止されているアルバイトを夏休みの間に経験していました。アルバイトをすること自体が、悪いことだとは思わないのです。しかし、アルバイト先で覚える大人社会(楽しさも含め)、そして今まで手にすることのなかったお金、これらの魅力に負けてしまうことが怖いのです。

夏休みは、一ヶ月そこそこで終わりを迎えます。

アルバイトで手持ちの金が増え大人気分の生徒、一円ももらえないのに、「朝早く起きて」登校し、堅苦しい「ルールを守り」、一日中「勉強する」、そんな生活には戻ってきません。

これが「本当の大人社会」に出るための準備であり、トレーニングだと説得するのですが聞く耳をもちませんでした。学校を辞め、数か月アルバイトを続け、「本当の大人社会」に片足を突っ込んだころ、アルバイトも止めることになります。

思い出に残る夏休み、一日が無限のようにたっぷりの時間だった夏休み、子ども達にとって、今しかできないことってどんな夏休みなのでしょう。

大谷翔平選手や藤井聡太七冠は、小学生の夏休みに何をしていたのでしょうか?

保護者の体験も話題にしながら、「楽しくカー杯」の夏休みを支援してあげてください。

「自分を育てるのは自分」著：東井義雄(致知出版社)より
※本文のなかに、不適切ととられかねない言葉がありますが、原文を尊重しました。

私の尊敬してきた、サイカ ショウコウというお坊さんがいます。
和歌山県の方です。小児マヒでしてね。
小学校の時、びっこをひいて帰りよった。

上級生が帽子を取って駆け出した。帽子を取り返そうとして、びっこをひいて追いかけてました。すると村中の子どもが、「ちんば、ちんば」まねをしはじめました。

人の悲しみを笑いものにするような人間は、皆さんの中にはいないでしょうね。
ところが、世間には案外いるのです。

悔しうて、悔しうて、泣きながら帰りかけました時、途中で、お父さんに会いました。

「お父ちゃん、あいつらが、ちんば、ちんばいうて、僕をいじめるよ」
そうかそうか。学校に行って先生にいつけるからなとでもいうてくださることを期待していたんでしょう、ところがお父さん、

「ちんばいわれて悔しければ、ちんばひかんようにせい」

何とひどいお父さんやろうか。

ちんばひきとうてひいとるんと違うわいといって帰ろうとした時、

「ついて来い」

松林に連れて行かれたといえます。

「そこへ座れ。お前がちんばをひくのは、左足に重りをかけると左足が痛む。だから左足をかばおうとして、どうしても右足に重みをかける。そのためにちんばをひくのや。左足をかばうから、左足はいつまでたっても強い左足になれん。痛いやろう。辛いやろう。けどもって左足を使え。今日から、その痛い左足でけんけんといびやってみい。お前お父さんの子やないか。お前なら、きっとできるわい。」

お父さんの目には、涙がいっぱい光っていたといえます。

代わってやれるものなら、小児マヒをお父さんが代わってやりたい。しかし、親と子の間でも、代わって生きてもらうことはできんのですね。生きるのは皆さん一人なんですよ。

著者の東井義雄氏は、1972年に八鹿小学校校長を定年退職した後も「いのちの教育」を続けられました。子どもたちに素晴らしい人生を送ってほしい、自分で自分の人生を粗末にするようなバカな生き方をしてほしくない、という祈りのような願いを持ち続けられた教育者です。